

# 多文化共生社会とことば館

## 日本語教室

1990(平成2)年頃から増え始めた外国人に対して、保険・医療、育児・就学、ゴミの分別など行政の外国人向けの制度や情報は整備されていなかった。また地域では言語や習慣の違いから様々な問題が起こりがちであった。

日本語教室はその対応策の一つとして89年には市民のボランティアで始まっていた。92年にインドシナ難民また小・中学生対象の教室も開講。94年に国際交流協会の日本語教室も開かれるようになった。

今では行政の対応や情報提供もだいぶ整い、平塚市を「多文化共生社会」として、お互いの文化の違いを理解し、尊重し合い同じ平塚市民、隣人として協働、生活しようという社会・住民意識が広がってきている。

## 『思い』をことばに

始まったばかりの日本語教室で、日本語の上手なブラジル人女性と会った。

「買い物や近所づきあいの会話は困ったことはない。思いを伝えることば・会話を勉強したい。大切な人になぜ嬉しい、なぜ悲しい。その思いを伝えられない」と言う。日常会話のさらに奥の思いを伝えられないもどかしさといった表情を浮かべながら切々と言う。

その後の教室活動の大事なヒントになった出会いだった。

最近のいじめや引きこもり、無差別に家族までを殺傷する事件として現われる若者の悲惨な症状は、もしかしたら心の奥底の思いを言語化できないもどかしさにあるのではないかと思う。自分の胸の内に広がる不安感や焦燥感、鬱屈している思いを文章にしたり話したりできれば解消できるかもしれない。ことばを得ることで文学、美術、音楽がさらに心に届くようになるかもしれない。そして周りの人たちと絆ができていくのではないか。

もちろん、幾千万のことばより一瞬の眼差しだけ、微かな表情だけでしか表せない思いもあるだろう。ことばが空しく感ずることもあるだろう。それでも私たちはことばを使って考え、心をつなぎ合わせて暮らす。

## ことば館

ことばと向き合い、自分を見つめるゆっくりとした空間と時間が持てるような文化施設が、一仮に『ことば館』と名付ける—このまちにできないだろうか。

多文化共生社会は、子ども、若者、大人の世代別の文化、また障がい者やジェンダーから発する文化、外国人それぞれ各国の文化、その違いを認め合い尊重し合う社会と言えるだろう。そんな社会を確実にしていくために、協働して作り上げて行く時、一人ひとりが深めたことばは大きな力となるに違いない。



## 中野 恵子

平塚市外国籍市民対応コーディネータ  
日本語教室ボランティア  
朗読講座講師

### インタナショナル・ナパサ

多言語で生活情報発信 / FM湘南ナパサ  
毎週火曜日 19時から20時

### とんでる二人の文学館

日本現代文学を紹介朗読 / FM湘南ナパサ  
毎週火曜日 14時10分から30分間

### 宮澤賢治朗読講座

平塚YWCA (平塚駅南口)  
第2,第4水曜日 14時から16時